

愛校心の背景にあるもの

奨励	菅澤 貴之〔すがさわ・たかゆき〕
奨励者紹介	同志社大学学習支援・教育開発センター専門調査員

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

(ヨハネによる福音書 15章1—5節)

学習支援・教育開発センター概要

はじめに、私が勤務している学習支援・教育開発センターについて紹介させていただきます。このセンターは、2004年に設立され(当時の名称は教育開発センター)、初代所長は文学部英文学科の圓月勝博先生が務められ、2013年4月からは社会学部教育文化学科の山田礼子先生が所長を務められています。

センターの目的は、学生さんの主体的(自発的)な学びを促進するための学習環境の整備、さらには、先生方が日々心血を注いでおられる教育改善活動などを継続的に推進・サポートすることにより、大学教育の充実と発展に寄与することにあります。

この目的を達成するため、FD支援部会、大学院教育検討部会、学習支援検討部会という三つの専門部会を設置し、大学の教育活動に関する学内シンクタンクとして、同志社大学が現在抱えている教育上の課題や今後の具体的な施策について調査・検討を行い、新たな企画や提案を積極的に発信しています。

具体的な事業としては、毎年秋学期に高校生を対象に開講される大学入学準備講座の運営、ラーニング・commonsの運営・管理、授業評価アンケート、キャンパスライフに関するアンケート調査の実施・分析などを行っています。

今日、皆様にお話させていただく私のメッセージ「愛校心の背景にあるもの」は、この「キャンパスライフに関するアンケート調査」のデータ分析に基づくものです。

「キャンパスライフに関するアンケート調査」とは

次に、「キャンパスライフに関するアンケート調査」について簡単に説明させていただきます。この調査は、センターが設立された2004年度から実施しています。調査の目的は、学生の大学入学後の成長や本学の教育に対する評価・要望などのデータを収集・蓄積することによって、同志社大学生の特徴を客観的に把握し、教育改善につなげていくことを目指しています。

調査は、毎年3月下旬の秋学期成績交付時に、1年次および3年次の終了時点のすべての学生を対象に行っています。調査項目は、大学進学への動機から、授業に対する取り組み、大学入学後に獲得した知識・技能、大学卒業後の進路まで幅広い領域をカバーしています。なお、学内のニーズ、すなわち、全学的、または個別学部が抱える教育上の課題に対応可能なようにと、調査項目は、毎年少しずつ見直しを行っています。

愛校心が調査項目となった背景

調査結果については、これまで学習支援・教育開発センターのホームページやセンターの機関紙であるCLFレポートの紙面をととして紹介してきましたが、2011年度から新たな試みとして個別に学部を訪問し、調査目的や結果を直接、教職員に説明する報告会を開催しました。

2011年度は合計4学部で、この説明会を開催しました。そのなかの、とある学部の先生の「最近、学生の愛校心が薄れてきている」という発言が発端となり、2011年度調査で学生の「愛校心」を捉える項目を追加することになりました。

2011年度調査データでみる愛校心の現状

そこで、2011年度の調査では、「あなたは、本学に対してどのくらい愛着がありますか」という項目を新規に設定しました。選択肢は「非常に愛着がある」、「かなり愛着がある」、「ある程度愛着がある」、「あまり愛着がない」、「まったく愛着がない」の5段階尺度です。今回の奨励では、1年次調査の結果を紹介します。

はじめに、「大学に対する愛着(愛校心)」の分布について確認します。回答結果をまとめた図1を見ると、「ある程度愛着がある」が半数弱で最も多く、「かなり愛着がある」、「非常に愛着がある」が続いています。一方、本学に対して愛着がないと回答した学生の割合は、2割ほどにとどまっています。ここから、学生の多くは本学に対して愛着を抱いていることがわかります。

入学時の状況と愛校心との関係

ただし、入学時の状況に着目して分析を進めると、入試形態や志望順位によって、学生の愛校心には濃淡があることが判明しました。なお、これから紹介する分析結果は、「非常に愛着がある」に5点、「かなり愛着がある」に4点、「ある程度愛着がある」に3点、「あまり愛着がない」に2点、「まったく愛着がない」に1点の値を与え、項目ごとに平均値を算出しています。したがって、平均値が5点に近づくほど本学に対する愛着(愛校心)が強く、逆に平均値が1点に近づくほど愛着(愛校心)が弱まることを表しています。

まず、入試形態に注目してみると、愛校心が最も高いのは、外国人留学生入試で入学した学生でした(図2参照)。このことから、日本人学生と比較して、外国人学生は本学に対する愛着が強いことが判明しました。さらに、一般入試・センター利用入試といった学力試験を経て入学した学生の愛校心は、推薦入試やAO入試で入学した学生に比べて低くなっています。この結果は、外国人留学生入試、AO入試といった募集人数が少ない入試で入学した学生ほど愛校心が強いことを意味しています。AO入試を突破するには、出願時に本学に対する強いこだわり(想い)が必要不可欠であり、それが入学後には愛校心という形で表れているのだと推測されます。

続いて、志望順位と愛着(愛校心)の関係を確認してみました。回答結果をまとめた図3をご覧ください。大学受験時の第一志望が「現在、在籍している学部(学科)」であった学生と「本学の他学部(他学科)」であった学生の間では、愛校心の強さにほとんど相違はありません。ただし、他大学を第一志望としていた学生は、本学を第一志望としていた学生に比べて愛校心が弱いことが示されています。したがって、他大学が第一志望であった学生、すなわち、本学に第一志望以外で入学した学生は、入学から1年を経ても同志社大学に対して肯定的な感情(愛着)を抱けない者が多いようです。

大学生活と愛校心の関係

それではなぜ、第一志望以外で本学に入学した学生の愛校心が低いのでしょうか。これは、第一志望以外で入学した学生の多くが、大学生活にうまく適応できていないことが原因の一つであるように思われます。実際、「大学では毎日新しい発見がある」という質問に対する否定的な回答の割合は、第一志望で入学した学生に比べて、第一志望以外で入学した学生の方が5ポイント以上も多くなっています。

そこで次に、大学生活への適応状況と愛校心との関係を確認してみました。集計を整理した図4によると、想定通り「大学では毎日新しい発見がある」という質問に対して、肯定的な回答をした学生ほど愛校心が強くなっています。

対人関係と愛校心との関係

では、なぜ大学生活に馴染めないのでしょうか。これには、周囲の人間関係が原因となっているのではないかと考え、「同じ学部・学科に友人がいる」、「教員と交流がある」という質問に対する回答と愛校心との関係を見てみました。結果をまとめた図5から、「同じ学部・学科の友人がいる」ことに対して、肯定的な回答をしている学生ほど、大学に対する愛着が強いことが見受けられます。同様に、「大学教員と交流がある」ことに対しても、肯定的な回答をしている学生ほど、愛校心が高くなっています。また、クラブ・サークル活動を熱心に行っている学生ほど、本学に対して強い愛着を抱いていることが示されています。これらのことから、人間関係を通じた大学とのつながりは愛校心の形成に影響を与えていると判断できます。

さらに、授業をととして学生と教員が積極的にコミュニケーションを図ることも愛校心の形成に寄与していることがわかりました。具体的には、授業中にS・A・Tからの助言やレポートなどの提出物に対して添削・返却を頻繁に経験した学生ほど、愛校心が高まる傾向にあるようです(図6)。

これらの結果を総合的に解釈すると、周囲との人間関係がうまく構築できないことから、所属組織である大学に対して愛着がもてなくなっていることと結論付けられそうです。学習環境の整備とともに学生の生活支援をどのように行っていくかが本学の課題となります。

学生の皆さんへのお願い

最後に、ある研究所の調査結果を紹介したいと思います。高等教育分野における退学抑制に取り組んでいるNPO法人日本中退予防研究所の調査結果によると、現在の日本では、およそ8人に1人の学生が大学・専門学校を中退し、年間の総中退者数は11万人以上に上るそうです。この数は高校中退者数を大きく上回っています。中退理由には、さまざまなものが

ありますが、「人間関係」は「学習意欲喪失」と同様に多くの比重を占めています。この研究所では、現在、日本全国の大学で周囲との人間関係を築けずに中退に至る学生が増えていると警鐘を鳴らしています。そして、残念ながら、同志社大学においても、過去5年間、中退者が一人もいなかった年はありません。

そこで、学生の皆さんにお願いします。大学に対して愛着がもてずに中退していく学生を減らすために、周囲に孤立している同級生を見かけたら積極的にコミュニケーションをとるようにしていただけますか。実は、私自身、本学に入学した直後、同級生とうまくコミュニケーションがとれずに悩んだ学生の一人です。「高校・予備校時代の友人が進学した関東の大学に自分も入学すればよかったのではないか」といったことを、4月中はよく考えていました。しかし、ゴールデン・ウィーク後の授業で、偶然、席が隣同士になった事がきっかけで会話をした男性と友人になったことで、学生生活が一変しました。その彼を介して学内で多くの友人をもつことができたからです。彼とは卒業後も連絡をとり、現在もお互いの悩みを相談しあっています。私は、自身の人生において生涯の友と引き合わせてくれた同志社大学に対して強い愛着の念を抱いております。

卒業後も「同志社大学で学んでよかった」と思える大学、村田学長の掲げる「夢の紡げる同志社大学」を実現するために、今後も私は日々の職務をとおして努力していきますが、学生・教職員の皆様もどうぞお力をお貸ください。

また、本日、お話をさせていただいたように、大学の抱える課題を検討するには、学生調査は極めて有効なツールとなります。ただし、同志社大学生の全体像を偏りなく正確に掴むには、高い回収率を維持する必要があります。引き続き、「キャンパスライフに関するアンケート調査」へのご協力をよろしくお願いいたします。

2013年5月7日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録

<HPでは図表等を省略しております。詳細は冊子体の『チャペル・アワー奨励集 289号』をご覧ください。>